

二〇二五年度 桐朋女子中学校入学試験 (A入試)

筆記試験 (国語)

受 験 番 号

氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから18ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は四五分間です。

一、次の①～⑮の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑩～⑳の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

- | | | | |
|---|------------|---|------------------|
| ① | 植物サイシユウをする | ② | 水分ホキユウをする |
| ③ | アツカンの景色だ | ④ | シシヨウをきたす |
| ⑤ | 湖上のユウラン船 | ⑥ | 書類にシヨメイをする |
| ⑦ | 適切にタイシヨする | ⑧ | リヨウシキある行動をとる |
| ⑨ | キンリヨクをきたえる | ⑩ | 道路をカクチヨウする |
| ⑪ | 勇気をフルう | ⑫ | 海外にキョジュウする |
| ⑬ | 今後のテンボウを語る | ⑭ | 使いやすさにテイヒヨウのある商品 |
| ⑮ | 海ガメがサンランする | ⑯ | 考えを異にする |
| ⑰ | 祝杯をあげる | ⑱ | 相手に判断を委ねる |
| ⑲ | 明晩まで待とう | ⑳ | 旅館を営む |

二、次の文章①・②を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合は、「、」や「。」などの記号も一字と数えます。

①

「母語」って、何でしょう？ 社会言語学者の田中克彦たなかかつひこさんは「母語」をこう規定しています、「生れてはじめて出会い、それなしには人となることができない、またひとたび身につけてしまえばそれから離れることのできない、このような根源のことばは、ふつう母から受けとるのであるから、『母のことば』、短かく言って『母語』ぼごと呼ぶことにする」。ひらたく言えば、幼児期に母親などの身近な人々から自然に

習い覚え、自分の中に深く入り込んである言語、それが「母語」です。

「母国語」というよく似た言葉がありますが、「母語」とは違いますので区別してください。母国語は、その人が国籍こくせきを持っている国で定められている共通語（公用語）のことです。「国語」「国家語」と呼んだほうが正確です。日本では、「母語」と「母国語」が一致いっちしている人が多いので、区別しにくいかもしれません。でも、テニスで有名な大坂なおみ選手を思い浮かべてみると、①両者の違いがよく分かります。彼女の国籍は日本ですから「母国語」は日本語です。でも、彼女の「母語」は英語です。

②国際化が進むと、日本でも、母語と母国語とが一致していない人がどんどん増えてきます。ですから、「母語」と「母国語」の区別は、日本でも必要になります。

（中略）

繰り返しますが、「母語」は、生まれてから本人が意識しないうちに自然に身につけた言語で、③あたかも肉体の一部であるかのようにあなたの中に入り込み、瞬時しゅんじに口をついて出てくる言葉です。「自然に身につけた言語」と言いましたが、実際には、たくさん時間を費やして習得しています。

私たちは、お母さんのお腹なかの中にいるうちから、母語のリズム、音の高低のパターンなど、母語の特徴をすでに学び始めています。そしてこの世に生まれた途端とたんに「まあ、かわいい！」などと、母の喜びの声を聞き、④家族の言葉のシャワーを浴びて育ちます。

（中略）

抱っこされて町中に出れば、犬や猫や車ねこに出会い、人の会話や歌や呼び声を耳にします。お母さんはそのたびに「わんわんよ」「にゃんにゃんよ」「ブーブーが来たねー」と子供に話しかけます。やがて保育園や幼稚園ようちえん、そして小学校に通い、同じ年の子供たちや先生と会話し、⑤母語の習得に拍車はくしゃがかかります。

寝^ねている八時間くらいを除くと、一日一六時間も日本語のシャワーを浴び続けています。ですから、小学六年生の一二歳^{さい}になるまでに、合計七万時間以上を費やして母語を習得しています。

ちなみに、日本で英語などの第一外国語を学ぶ時間は、小学六年生までで、二一〇時間。大学卒業までにトータル約一一〇〇時間。母語が、いかに長い時間をかけて無意識のうちにマスターした言語であるかが分かります。だから、自由自在に操^{あやつ}れる！

⑥ これを大事にしない手はないではありませんか。

③ 次は、文法的な側面に焦点^{しょうてん}を当てましょう。注目するのは、文を作る時の主語・目的語・述語の順序です。

日本語であれば、「私がおかずを作る」という語順で述べます。「私」が主語、「おかずを」が目的語、「作る」が述語ですから、⑦ 「主語＋目的語＋述語」の順で述べていることになります。この三つの要素で最も大事なものはどれでしょうか？ 述語です。主語や目的語は省略できますが、述語を省略することはできません。

主語を略して「おかずを作る」は文として成り立つし、目的語を略して「私を作る」も、文として成り立ちます。でも、述語を省略して「私がおかずを」は、文として成り立ちません。「どうする」という述語がないと、文は完結しないのです。

こうして、述語が文の成立には欠かすことのできない、最も重要な要素であることが分かります。

日本語は、「主語＋目的語＋述語」の語順ですから、一番大事な「述語」を最後に持ってきている言語です。

(中略)

文の成立になくてはならない述語を最後に持ってくるということは、大事なものは常に後ろに配置す

るという性質があるのではないかと思わせます。(A)、修飾語しゅうしよくごと修飾される語の位置関係に注目してみます。

先ほど例にあげた「おかず」にさまざまな修飾語を付けてみます。「おいしいおかず」「よだれの出そうなおかず」「いろとりどりのおかず」「昨日食べたおかず」「母がよく作ってくれたレモン入りのさわやか味のおかず」……。どんなに長い修飾語を付けようとも、修飾されている「おかず」より前に来えます。

ところで、修飾語と修飾される語とを比べると、どちらがより重要ですか？ 修飾される語「おかず」ですね。「おかず」がないと、文は成立しません。(B)、修飾語は飾りなので、とりさっても文の成立に影響を与えません。

日本語ではいついかなる場合でも、大事な修飾される語のほうが、修飾語より後に来ます。(C)、修飾語と修飾される語との関係でも、大事な修飾される語が後ろに来るというシステムを守っていることが分かります。

(中略)

さて、⑧ つらぬ この原則を貫く日本語の文は、一体何をもたらずでしょうか？ 聞き手に最後まで聞いていることを強制する力です。文末まで聞かなければ、話し手の言いたいことが分からないのです。

「その案はなかなか面白いので採用したいと思いますが、諸般しよはんの事情を * 勘案かんあんして見送りましょう。」などと言われる。文の途中とちゅうまでは喜んでいても、最後になってダメなことが分かる。最後まで聞かないと、相手の言いたいことが分からない。

また、勢い込んで文も切らずに長々と話され、現在の話かと思って聞いていると、最後に「だったのよ。」と言われて、「なあんだ、過去の話だったのか」と文末で初めて知る。最も大切な述語が最後にあ

るから、話の向かっていく方向がつかみにくいのです。

「どっちに行くのだろう？」と頭の中を疑問符でいっぱいにしてしながら話を聞いています。長々しい修飾語があると、聞き手は「何のこと？」と思いながら、修飾される語が出てくるのを、耳を澄まして待ちます。

こんなふうに、聞き手に最後まで聞くことを強制する力を持つ言語、それが日本語なのです。相手の話をよく聞くという態度が要求されるのは、こうした日本語の仕組みにもよっているわけです。

(山口仲美『日本語が消滅する』幻冬舎)

* 勘案して——あれこれ考えあわせて

問い一、——線部①「両者の違い」とありますが、i「母語」とii「母国語」とはどのようなものであるかを説明している部分を、iは四十字、iiは二十九字で本文中からそれぞれぬき出し、始めの五字を書きなさい。

問い二、——線部②「国際化が進むと、日本でも、母語と母国語とが一致していない人がどんどん増えます」とありますが、それはなぜですか。その理由を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国際化が進むと、自分の国籍とは違った国で生まれ育つ人が増えるから。

イ 国際化が進むと、複数の国々で仕事をし、複数の言語を話せる人が増えるから。

ウ 国際化が進むと、英語が公用語になり、英語が母語になる人が増えるから。

エ 国際化が進むと、消滅する言語が多く生まれ、母語が限定される人が増えるから。

問い三、——線部③「あたかも肉体の一部であるかのように」、——線部④「家族の言葉のシャワーを浴

びて」という表現に用いられている表現技法を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。
ア 倒置法 どうちほう イ 直喩法 ちよくゆほう ウ 擬人法 ぎじんほう エ 対句法 ついくほう オ 隠喩法 いんゆほう

問い四、——線部⑤「母語の習得に拍車がかかります」とありますが、「拍車がかかる」とはどのような意味ですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 規制が強くなる イ 価値が倍増する ウ 進行が早くなる エ リズムが一定になる

問い五、——線部⑥「これを大事にしない手はないではありませんか」を、「ない」を使わずに言い換えなさい。ただし、「これ」が指すものを明らかにし、十字以上十五字以内で書くこととします。

問い六、——線部⑦『主語＋目的語＋述語』の順」になる文を自分で考え、十字以内で書きなさい。ただし、本文中にある文は除きます。

問い七、空らん（ ） A・B・Cに適切な語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ それに対して ウ また エ なぜなら オ そこで

問い八、——線部⑧「この原則を貫く日本語の文」とありますが、

(1) 「この原則」とは、どのような原則ですか。十字以上十五字以内で、「という原則」につながるように答えなさい。

(2) 「この原則」は、わたしたちが会話をする時のどのような姿勢につながると、筆者は言っていますか。本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問い九、筆者はまた、「母語」について以下のように述べています。これを読んで後の〈問い〉に答えなさい。

また、母語は、その民族固有の文化をつくりあげています。ここで言う「文化」とは、その集団を構成する人々によって習得され、共有され、伝達される思考様式・行動様式・生活様式を指しています。（中略）

また、島国という閉じられた環境で、人間同士がうまく生きていくためには、争いを最小限にするほうが効率的です。そのためには自己主張は抑えたほうがいい。④相手の立場に立つて、物事を見ることが大事です。（中略）
こうした相手の立場になって物事をとらえるという思考様式は、人を指す呼び名にも現れています。たとえば、迷子になった男の子に大人が話しかける時は、「^⑤ぼく、誰と来たの？」などと、（中略）呼びかけます。

〈問い〉——線部⑥のように呼びかけることが、——線部④の例になっている理由を、次のように説明しました。空らん（ ） i・ii にあてはまる語を書きなさい。

【本来ならば「（ i ）」と呼びかけるべきはずなのに「（ ii ）」と呼びかけているから。】

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合は、「、」や「。」「」などの記号も一字と数えます。

「十月のときめきっ子タイムでは、ときめき地区で活動している人を調べて発表してもらいます」担任の奥村先生が言った瞬間、斜め前の席の野原結芽ちゃんがにやにや笑ってこっちを向いた。①きつとわたしの考えがバレてるんだらう。わたしはノートの表紙に書いた「膳所から世界へ！」の文字を見つめた。

わたし、北川みらいは大阪市立ときめき小学校に通う四年生だ。小学校は膳所駅からびわ湖方面に下る坂の途中にある。もともとは馬場小学校という名前だったけれど、平成のはじめに坂の名前が「ときめき坂」になったのがきっかけで、ときめき小学校になった。

ときめきっ子タイムは難しい言葉でいうと「総合学習の時間」で、ときめき地区の歴史や特色を学ぶ時間だ。今月はときめき地区で活動している人がテーマらしい。わたしが調べたい人なんて、あの人たちしかない!

「それでは、班ごとに誰^{だれ}を取り上げたいか話し合ってみましょう」

机をくつつけるなり、わたしは「ゼゼカラがいい!」と声を上げた。結芽ちゃんは「やっぱり!」と笑う。

「誰それ」

同じ班の男子、たいちゃんとくらっちは声をそろえた。みんなもゼゼカラの名前ぐらいは知っているかと思ったけれど、そうじゃないんだとがっかりする。

「ときめき夏祭りで司会をしてる人たちだよ」

結芽ちゃんが言うのと、くらっちは「ああ、あのユニフォームの人たちね」と思い当たったみたいだけど、たいちゃんはメガネのフレームを触^{さわ}りながら「行ったことないからなあ」と首をかしげる。

ゼゼカラは成瀬^{なるせ}あかりさんと島崎^{しまざき}みゆきさんによる、女子高生の二人組だ。毎年八月に行われるときめき夏祭りで司会をしている。

(中略)

「②二人はどうしてゼゼカラになったんですか?」

「中学二年生のとき、M・1^{エム・ワン}グランプリに出ることになったんだ」

「成瀬が『お笑いの頂点を目指す』って言い出したんだよ」

島崎さんは笑顔^{えがほ}で言うが、わたしは笑っているのかわからなかった。いくら成瀬さんでも、M・1^{エム・ワン}グランプリで優勝するのは難しいだろう。もしわたしが学校でそんなことを言ったら笑われるに違^{ちが}いない。

「ゼゼカラの名前は島崎が付けたんだ」

「そう。最初は『膳所から来ました！』って言って漫才まんざいをはじめてたけど、膳所で漫才をやるのにその入り方はおかしいなって思っ、『膳所から世界へ！』に変えたの」

「すごくいいなと思っ、わたしもここに書いたんです」

わたしはノートの表紙に書いた「膳所から世界へ！」の文字を見せた。

「わあ、ありがとう」

「わたしも『膳所から世界へ！』は素晴すばらしいキャッチフレーズだと思っっている」

成瀬さんは真剣しんけんな表情でうなずいた。

ゼゼカラの歴史について聞いていると、「やっほー！」と言っ、結芽ちゃんがやってきた。ちゃんと覚えてくれたんだとほっとする。

「同じ班の結芽ちゃんです」

「こんにちは」

結芽ちゃんは軽く頭を下げて、わたしの隣となりの席に座すわった。

「ゼゼカラの歴史について聞いたよ」

「へえ、すごいね」

ノートの見開き二ページが二人の話した内容で埋うまっている。

「二人はもう高校三年生ですよね？ この大学を受けるんですか？」

結芽ちゃんが遠慮えんりょのない調子で話すので、わたしは心配になる。そんな踏み込ふみこんだことを訊きいて大丈夫だいじょうぶだろうか。

「わたしは京都大学を受けるつもりだ」

「わあ、すごい！」

③ わたしよりも早く結芽ちゃんに反応されて、なんだか悔しい。

「わたしは東京の大学に行く予定なの」

島崎さんの答えに、鉛筆えんぴつを持つ手が止まる。

「引越こしちゃうんですか？」

「うん。でも、ちよくちよく戻もどってくるつもり」

「えー。寂さびしいです」

すぐに返答する結芽ちゃんの隣で、わたしは体が冷えていくのを感じた。島崎さんがときめき地区からいなくなっちゃうなんて。

「えっ、そんな、泣かないで」

島崎さんのあわてた様子で、自分が泣いているのがわかった。島崎さんがいなくなるのはもちろん寂しいのだけど、それだけじゃない。ときめき地区が、わたしが当たり前だと思っっていることが、少しずつ崩くずれていくのが不安なのだ。

これまでも同級生が転校すると聞くと、全然話したことがないような子でも寂しかったし、不安だった。その子が引越したあとも学校はいつものように続いているけれど、その子は本当に別の学校に行ったのか、もしかしたら消えちゃったのかもしれない、なんてことを思っていた。

④ こういうことを上手うまく伝えられる気がなくて、わたしは涙なみだを流しながら「大丈夫です」と顔の前で手を振ふった。

「みらいちゃんはよく泣くんです」

結芽ちゃんが二人に説明する。たしかにわたしは学校でもときどき泣いてしまうことがある。泣かな

いほうがいいとわかっていても、涙がこぼれて止まらなくなるのだ。

「もしかしたら、北川は島崎がいなくなることで、バランスが崩れるのが不安なのかもしれない」

思ったことを言い当てられて、わたしはぼかんと口を開けたまま成瀬さんを見た。

「わたしも島崎が東京に行くとき聞いたとき、心身のバランスを崩したんだ。きっと自分の世界に穴が空いて、そこに足を取られたんだろうな」

成瀬さんはポケットティッシュをわたしに差し出した。

「北川にとって、ゼゼカラは小さな存在かもしれない。でも、小さな歯車が欠けても仕掛け全体が回らなくなるように、ゼゼカラの存在がどこか大事なところに入っていたということだ」

「あー、たしかにそういうことであるかも」

島崎さんもうなずく。

「そういえば、成瀬さんはどうしてパトロールをしてるんですか？」

結芽ちゃんが話を切り替える。わたしは成瀬さんにもらったティッシュで涙を拭いて、鉛筆を握り直した。

「ああ、あれは単純にわたしの趣味だ。かるた班を卒業して時間ができたから、学校帰りにときめき地区を巡回するようになった」

「危ない目に遭うと困るから、やめたほうがいいって言ってるんだけど」

島崎さんが口を挟む。

「いや、実際に何かをするわけじゃない。道を歩いている人がいるだけでも犯罪抑止につながるんだ。意外とけが人や病人に出くわすこともあるって、これまで二回救急車を呼んだ」

結芽ちゃんは「へえ」と相槌を打つ。

「校長先生から、成瀬さんが振り込め詐欺さぎを防止したとか、引ったくりを捕つかまえた話も聞きました」
わたしが言うと、成瀬さんは「振り込め詐欺は防いだことがあるが、引ったくりを捕まえたことはない」と首をかしげた。

「すごい、都市伝説じゃん」

島崎さんが目を丸くする。そんなうわさが出回るなんて、やっぱり成瀬さんはすごい。

「あの、わたしもパトロールを一緒いっしょにやらせてもらっていいですか？」

成瀬さんの見ている景色けしきを見てみたくなった。

「それならこれから行った方がいい」

島崎さんも結芽ちゃんも「いいよ」と同意してくれて、四人でときめき地区を回ることにした。成瀬さんは自腹で買ったというパトロールの腕章わんしょうを左腕ひだりうでにつける。

「今日は土曜日だからそこそこ人が多いな。平日は全然人がいないんだが」

わたしは成瀬さんと並んで歩き、結芽ちゃんと島崎さんが後ろからついてくる。二人は小学校の話で盛り上がり上がっているようだ。

「ゴミ拾いも大事な任務だ」

成瀬さんは軍手をはめてペットボトルを拾い上げ、持参していたゴミ袋ぶくろに入れた。

「成瀬さんは将来何になるんですか？」

漫才も司会もできて、パトロールが趣味で、京大を目指すほど勉強が得意な人は将来何になるんだろ
う。

「先のことはわからないからなんとも言えないが……。何になるかより、何をやるかのほうが大事だと思っ
ている」

何になるかより、何をやるか。わかるようなわからないような言葉だけど、成瀬さんが言うとかっこよく感じる。

「たとえばわたしはパトロールを好きでやっているが、警察官になりたいとは思ってない。会社員になったとしても、パトロールはできるだろう。だからわたしが何になるかは未定だが、地域に貢献したいとか、人の役に立ちたいとは思っている」

わたしは⑤鳥肌が立つのを感じた。わたしはこれまで何になりたいか訊かれたら、ケーキ屋さんとかお花屋さんとか好きなお店を適当に答えていた。でも、何をやりたいかと考えたら、人を笑顔にしたいとか、別の視点が生まれる。何になるかより、何をやるか。あとでちゃんとノートに書いておこうと思った。

(中略)

その日の帰り、わたしはまっすぐ家に帰らず、膳所駅の方まで行ってみた。成瀬さんが月曜日はときめき坂をパトロールしていると言っていたからだ。だけど成瀬さんは見つからず、諦めて引き返すことにした。

すれ違った上級生のランドセルからリコーダーがはみ出ているのを見て、教室にリコーダーを忘れてきたことに気付く。今日の宿題はリコーダーの練習だったから、取ってきたほうがいい。

学校に戻って昇降口で靴を脱ごうとしたところで、「うちの班はみらいちゃんかゼゼカラにするって決めちゃったからなー」と話す結芽ちゃんの声が聞こえた。とたんに嫌な予感がたちこめてくる。わたしは脱いだ靴を持ち、隣の学年の下駄箱に急いで隠れた。

「夏祭りの司会の人だっけ? 『膳所から世界へ!』って、本気で言ってるのかな」

この声は一組の璃央ちゃんだ。頭の中で「がーん」と大きな音が鳴った。

「結芽ちゃんもゼゼカラに会ってきたの？」

「うん、一人は普通の人で、一人は変わった人だったよ。一度聞いた人の名前は忘れないとか、趣味でパトロールしてるとか」

「やば」

「それと、乾いた昆布^{かわ}をバリバリ食べてた」

「昆布なんてそのまま食べる人いるの？」

二人の笑い声を聞いて、⑥わたしは体中が熱くなっているのを感じた。足音を立てないように奥^{おく}へと進み、二人が出ていくのを見送る。気付けば涙^{あめ}が顎^{あご}を伝って床^{ゆか}へと落ちていた。教室からリコーダーを取ってきて、学校を出る。

どうして結芽ちゃんはあることを言うんだろう。もしかしてわたしのことが嫌^{きら}いなのかな。これまで仲良くしてくれていたのも嘘^{うそ}みたいに感じる。ゼゼカラを調べるのがいやなら直接言うてくれたらよかったのに。

でも、もしかしたら璃央ちゃんと話を合わせてああいうふうに言ったのかもしれない。あんまり好きじゃないキャラクターでも、友だちが持ってたなら「かわいいね」って言うみたいな感じ。わたしが聞いてるって知ってたら、あんなこと言わないだろう。

そんなふうに考えてもやっぱり気持ちはずれなくて、うつむきながらときめき坂を下っていった。

「あれ、みらいちゃん？」

名前を呼ばれて顔を上げると、大津高校の制服を着た島崎さんがいた。

(中略)

「ときめきっ子タイムの調べ学習は進んでる？」

さっき結芽ちゃんが言っていたことを思い出して、また涙があふれてくる。

「あぁっ、変なこと訊いてごめん。話したくなければ話さなくていいから」

「結芽ちゃんたちに、成瀬さんのことを馬鹿にされたんです」

わたしはさっきあったことを少しづつ話した。島崎さんは「そっか」と⑦相槌を打ちながら聞いてくれる。

「みらいちゃんは本当に成瀬のこと好きでいてくれるんだね。わたしもううれしいよ」

⑧島崎さんも悲しんだらどうしようと思っていたのに、なぜか喜ばれた。

「実際成瀬は変だし、結芽ちゃんが成瀬を変だって友だちに話すのも自然だと思っただよ。別にそれはゼゼカラを選んだみらいちゃんのこと嫌いになったわけじゃないし、そういう意見の人もあるってことじゃないかな」

公園では幼稚園ぐらいの子どもたちが笑い声を上げて駆け回っている。

「けどまぁ、自分の好きな人とか物をけなされると嫌な気持ちになるのは間違いないね。気にしないようにするしかないのかも」

わたしはポケットからハンカチを出して、涙を拭いた。

「成瀬もみらいちゃんぐらいの頃には学校で嫌われてたんだよ」

「そうなんですか？」

島崎さんはうなずいて話を続ける。

「五年生のときなんて、クラスのみんなに無視されてたからね。どうしたってそういう時期はあるんだと思う」

成瀬さんは小さい頃から人気者だと思っていたから、意外だった。

「わたしもそのころは成瀬を避けてたんだよね。成瀬は強いから気にしてなかったみたいだけど、なかなかあんなふうにはなれないよね」

島崎さんはぼりぼり音を立てながらポッキーを食べる。

「あっ、噂をすれば」

公園の柵の向こうに腕章をつけた成瀬さんが見えた。島崎さんが「なるせー」と呼びかけて手を振ると、成瀬さんも気付いて公園に入ってくる。泣いていたことがバレないように、顔全体をハンカチで拭いた。

「発表の準備は順調か？」

わたしはとっさに「ばっちりです」と答えていた。結芽ちゃんは陰ではああ言っていたけれど、発表の準備には協力してくれている。

「それはよかった」

成瀬さんがうなずくのを見て、^⑨胸がちくつと痛くなる。

「二人はここで夏祭りの司会にスカウトされたんですよね？」

「そうだ。せっかくだからひとネタやろう」

島崎さんは「ええー」と言いながらもどこかうれしそうに立ち上がった。二人はわたしに背を向けて一言二言交わしたあと、こっちに向き直る。

「膳所から世界へ！」

二人は同時に指先を空へと向ける。^⑩「膳所から世界へ！」をはじめて聞いたときの感動が、全身にぞわっと蘇るようだった。

（宮島未奈『成瀬は信じた道をいく』新潮社）

問い一、——線部①「きつとわたしの考えがバレてるんだらう」とありますが、「わたしの考え」とはどのような考えですか。三十字以内でまとめなさい。

問い二、——線部②「二人はどうしてゼゼカラになったんですか？」とありますが、「二人」の氏名をそれぞれ書きなさい。

問い三、——線部③「わたしよりも早く結芽ちゃんに反応されて、なんだか悔しい」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 結芽ちゃんよりも自分の方が成瀬さんと会話がはずむはずだから。

イ 結芽ちゃんよりも自分の方が京都大学をすごいと思っているから。

ウ 結芽ちゃんよりも自分の方がゼゼカラに対する思いが強いはずだから。

エ 結芽ちゃんよりも自分の方が二人の進路を気にしているから。

問い四、——線部④「こういうこと」とは、どのような状況と気持ちを指していますか。それを表現している一文を本文中からぬき出し、始めの五字を書きなさい。

問い五、——線部⑤「鳥肌が立つ」、——線部⑦「相槌を打ちながら」の意味をふまえ、ここでの人物の気持ちを示す表現として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

⑤ ア 感動 イ おそれ ウ にくしみ エ 期待

⑦ ア 強い反発 イ 軽い共感 ウ 大きな喜び エ 小さなおどろき

問い六、——線部⑥「わたしは体中が熱くなっているのを感じた」とありますが、そのように感じた理由として、適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友だちだと思っていた結芽が、いっしょに調べているゼゼカラについて、悪口に思えることを言い合っていたから。

イ 友だちだと思っていた結芽が、一風変わった行動をとる成瀬さんのことを、ばかにするような発言をしていたから。

ウ 友だちだと思っていた結芽が、ゼゼカラについて調べることが、実はいやだったのかもしれないと感じられたから。

エ 友だちだと思っていた結芽が、自分のゼゼカラに対する思いがいつわりではないかと疑う発言をしていたから。

問い七、——線部⑧「島崎さんも悲しんだらどうしようと思っていたのに、なぜか喜ばれた」とありますが、島崎さんが喜んだのはなぜか、説明しなさい。

問い八、——線部⑨「胸がちくつと痛くなる」とありますが、それはなぜですか。次の文の空らんにあてはまる語を、本文中から指定された字数でぬき出して、書きなさい。

【表面的には、発表の準備に、（i 二字）してくれている結芽ちゃんは、成瀬さんのことを（ii 二字）にしており、そのことを自分たちの発表に協力してくれている（iii 二字）さんに話せずにいるから。】

問い九、——線部⑩「『膳所から世界へ！』をはじめて聞いたときの感動が、全身にぞわっと蘇るようだった」とありますが、この表現から、みらいが「総合学習の時間」でテーマに選んだゼゼカラに対して、熱い思いをもって準備にはげんでいたことがわかります。

では、あなた自身が小学校時代に経験した、総合学習や調べ学習の、

「i テーマ（タイトル）」・「ii 具体的な活動内容」・「iii その活動を通して学んだこと」をそれぞれ紹介しなさい。

ただし、ii・iiiはそれぞれ一文で書くこととします。